

今回の見学会のテーマは、「江戸時代に塩で栄えた行徳を訪ねる」でした。

〈一年前にこの見学会で訪ねた国府台は、東京と千葉の県境を流れる江戸川中流域の左岸でしたが、ここ市川市行徳は、市川駅近くの高層ビル屋上から観ると、千葉県のはずなのに江戸川下流域の右岸に見えます！ これは大正8年に行徳の東に分流放水路を造り、これを本流としたためです。そして元の川筋は「旧江戸川」と名称変更されました。〉

旧江戸川の左岸・南面に広がる行徳は、江戸時代は製塩地で、軍事的に重要な地ゆえに直轄領でした。またこの旧江戸川は、墨田区の南側で隣接する江東区北辺を東西に開削された小名木川に繋がり、江戸と直結した安全な舟運の一大集積地となり、大いに栄えました。

見学会当日は、中国内モンゴル由来の黄砂による視界不良が若干気になるお天気朝でしたが、12名が集まりました。旅程4.3km/3.5hsのはじまりです。のんびりと散策気分で、最初の見学地「湊水神宮」に向け出発しました。(途中、本殿の彫刻木地が見事な「押切稲荷神社」にも立ち寄りしました)。

ここ湊水神宮は案内立て札によりますと、旧江戸川左岸に数々あった河岸の一つで「行徳河岸」と呼ばれ、貨物専用の河岸であり、水神様を奉る祭礼河岸とのことでした。

次は、旧江戸川左岸を上流に向かって歩き、行徳街道沿いにある「市川市行徳ふれあい伝承館(旧浅子神輿店)」です。ここ行徳は、かつては御輿造店が数件あり、御輿造りは地場産業でした。中でも、ここ浅子神輿店は仏師の系譜を引く老舗で、今でも東京下町の江戸っ子にはお馴染みの富岡八幡宮御本社御輿など、数々の作品が世に残されています…等々や、地元住民の方による御輿担ぎの例大祭を含めた館内解説を、一時間ほどかけて楽しく聞かせていただきました。

昼食は伝承館向かいの休息所で各自持参のお弁当等を摂り、集合写真を撮り、常夜灯公園にある高さ4.3mの大きな「常夜灯」見学に向かいました。

その後、かつての栄華を偲ばせる立派な旧家を観ながら行徳街道を横切り、林立する寺院(寺町)の前の細い路地を一列になってクネクネと西進しました。この古道が、徳川家康が鷹狩りに通ったという「権現道」です。

権現道の西端近くの交叉点は行徳街道と成田街道の分岐点で、標識石柱が近年発掘され、近くの「神明神社」の鳥居脇に保管展示されていました。江戸から水路を来た成田詣での人々がこの地で下船し、この石柱を目印に一路、成田山を目指したのでしょうか。

寺町通りに面する「徳願寺」は案内板によると、明治初期に一時、印旛県庁舎が置かれたほどの大寺であったようです。ここを帰路・折返点とし、「馬頭観世音堂」や「おかね塚」を詣でながら迷路のような細道を一路東進し行徳駅に向かってゆっくりと帰ってきました。

文末になってしまいましたが、この度の見学会の印象を、会員の早田氏が当会のグループメールに投稿されていますので、許可を得て転載させていただき、見学会報告といたします。

『江戸川区の対岸に江戸の生活を支えていた“塩”の生産地があったこと、その塩や野菜、魚などの運搬のため小名木川水路開発が行われ、また、その繁栄に伴い寺院や神社が多く存立しているのを目の当たりにした「行徳」散歩を堪能いたしました。また、繁栄の陰には「おかね塚」のような悲話が生まれ、歴史の裏表にも触れることができました。』

文責:河村